

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：31302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K01023

研究課題名（和文）中国塩神廟の調査と研究

研究課題名（英文）Research for Chinese Salt Providence Shrine

研究代表者

谷口 満（TANIGUCHI, Mitsuru）

東北学院大学・アジア流域文化研究所・客員研究員

研究者番号：10113672

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：中国塩神廟についての情報を網羅的に収集し、そのデータをもとに中国塩神信仰史の諸問題を考察して、次のような学術的理解を獲得した。1.中国の塩神は、塩神廟の数だけ異なった神格があるといっているほどに多種多様である。この多元性は、塩土老翁神以外の塩神がほとんど見られない日本の塩神神格の一元性とはっきりした対比をもつ。2.塩神信仰は、塩業従事者のみならず地域住民全体の経済・政治・社会活動において、重要な精神的紐帯の役割をはたした。3.政府による塩神信仰管理にもかかわらず、在地住民独自の塩神信仰が強く存続している場合が多かった。4.塩神伝説には抒情性に富んだものが多く、今なお語りつがれている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中国各地の塩神廟について、その神格・沿革・運営・祠廟・祭祀などの情報を網羅的に収集して中国塩神信仰史研究の基礎データを構築したのが第一の学術的意義、そのデータに基づいて中国塩神信仰史の諸問題を考察し、中国塩神神格の多元性、塩神信仰の在地住民の経済・政治・社会活動における精神的紐帯としての機能、政府の管理に対抗しての民間塩神信仰の独自性・自立性の強さなど、中国塩神信仰のいくつかの特色を明らかにしたのが第二の学術的意義であり、中国の学術機関において研究成果を現地で直接公開したことや、調査報告や予備調査メモを公表して広く日本の学界や学生・市民に研究の成果を公開したことなどが、社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：Based on field investigation and documentary research of the Chinese Salt Providence Shrine, the following study knowledges were elucidated. 1.Chinese Salt Providences had a large variety of God hoods. Such pluralistic phase was a contrast to oneness phase of Japanese Salt Providence hoods. 2.In economic political and social activity of several areas people, the faith of Salt Providence performed their spiritual ties. 3.In opposition to faith control of government, several areas people occasionally found their original Salt Providence Shrines for keep self-support of faith mind. 4.Many legends of Chinese Salt Providences were rich in lyricism and have been handed a story down from generation to generation up to now.

研究分野：中国史

キーワード：中国塩神廟 井塩地区塩神廟 海塩地区塩神廟 池塩地区塩神廟 中国塩神神格の多元性 民間塩神信仰の独立性 塩神伝説の抒情性 日本塩神神格の一元性

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

研究代表者が中国塩神信仰史研究を企図したのは15年ほど前のことであり、本科学研究費開始当初の時点までに次のような前提作業を実施していた。(1)いくつかの学術研究を参照して、中国塩神信仰史についての研究蓄積は必ずしも豊富ではなく、手つかずの課題が多く残されていることを確認した。(2)祠廟で祭祀されない塩神も存在したがそれはごく少数であり、塩神の多くは祠廟に祭祀されており、文献資料による限りそれらの塩神廟のうち30基ほどが近年まで存続し、10基ほどが今なお残存していることを確認した。そして、中国塩神信仰史研究の主要資料といえば、実はそれら30基ほどの塩神廟をめぐる関連資料において他にはないのが資料保存状況の現実であり、そこで研究内容をより直接的に示すために、科学研究費の課題を「中国塩神廟の調査と研究」と設定することにした。(3)塩神廟の残存状況と相關民間資料の保存状況を調査するため、手はじめに四川省・甘粛省において3基の塩神廟を現地調査して、現地調査でなければ収集しえない資料が数多いことをあらためて確認し、以降の現地調査についての基本計画を策定した。(4)研究遂行のためには現地研究者・学術機関との連携が不可欠であり、重慶師範大学歴史与社会学院・四川省自贡市塩業歴史博物館などと事前連携を行った。(5)塩神神格の多様性、他宗教・他民間信仰との習合事情、塩神廟所在地区各層の経済・政治・社会活動において塩神信仰が果たした機能、塩神廟の管理・運営をめぐる政府当局と在地住民の相克、塩神伝説の民俗学的・文学的内容などについて、新しい学術的知見を獲得すべく、関連研究書・研究論文の入手を開始した。

2. 研究の目的

存在を確認することができる中国各地の塩神廟を網羅的に列挙し、その所在地・神格・設置事情・管理運営事情などについての資料を収集して、それらに神像・廟屋の写真を付した中国塩神廟研究の資料データベースを作成することが第一の目的であり、そのデータベースを駆使して、神格の種類、塩神信仰と他宗教・他民間信仰との習合、塩神信仰が経済・政治・社会活動において果たした精神的紐帯としての役割、塩神廟の管理・運営における政府当局と在地住民の関係、塩神伝説の様相といった、中国塩神信仰史における諸問題を考察することが第二の目的である。

3. 研究の方法

中国塩神廟研究の資料データベースの作成については、清周慶雲編纂『塩法通志』「祠宇」・宋良曦『塩史論集』(2008年)・張銀河『中国塩文化史』(2009年)にみえる塩神廟一覧を基礎データとして、さらに文献資料と現地調査資料からの新たな収集例を加え、より豊富で詳細な資料データベースを構築する。文献資料からの収集は、宋元明清時代の地理書及び関連の図録・清代編纂の各地域塩法志などによることとし、現地調査資料の収集は残存する塩神廟の現地で、在地保存管理者からの聞き取り・民間伝承の聞き取り・民間伝承集録冊子の閲読、祭祀活動の調査、神像・祠廟などの撮影を実施することによるものとし、研究期間中都合5回の現地調査を計画した。

中国塩神信仰史における諸問題の考察については、作成した資料データベースを解析して考察を進めるとともに、自贡塩業歴史博物館・中国塩業協会編『塩業史研究』などの専門誌に掲載された従来の研究成果を参照しつつ、考察の結果をまとめて「中国塩神廟調査報告」と題した調査報告の形式で、4回にわたって公表することを計画した。

4. 研究成果

存在を確認することができた30基ほどの塩神廟のうち、28基について所在地・神格・廟宇の残存状況・設置時期と設置事情などの情報を収集し、中国塩神廟研究資料データベースの第一次作成を実施しえたのが第一の成果である。四川・甘粛・雲南・湖北の井塩地区21基、江蘇・天津の海塩地区6基、山西の池塩地区1基であり、そのうち18基について、そのデータ情報の大半を「中国塩神廟調査報告」(1回)と「予備調査メモ」(3回)によって公表した。

中国塩神信仰史の諸問題を考察して、次のような学術的知見を獲得したのが第二の成果である。

(1)中国塩神の神格は、塩神廟の数だけ異なった神格があるといっているほどに多種多様である。すなわち、塩源の発見者・塩業生産の保全者・塩業技術の開発者・塩業行政の管理者・塩商人など塩業に直接かかわった人物はもとより、著名な古帝王や龍神、あるいは塩源発見を導いた動物や塩生産道具までもが塩神とされた。しかも男神・女神の双方があり、漢族の人物・少数民族の人物の双方があった。その総数は30体ほどであり、そのうちの20体ほどは四川省井塩地区の塩神である。この中国の塩神神格の多元性は、中国の他の生業神信仰には見られない特異な現象であるし、また全国各地に散在する塩塩神社の祭神はほぼ全部が塩土老翁神で

あり、それ以外の塩神はほとんど見られないという、日本の塩神神格の一元性とも明瞭な対比をなしている。

(2) 中国の塩神は、当初は単独の祠廟をもち単独で祭祀されていたものの、後には道教寺院や仏教寺院に移転されて、道教神や仏教神と並列して祭祀されるようになるものが多かった。また、有名な道士である張道陵や新羅出身の僧侶一新など、道士や僧侶が当初から塩神として祭祀された例もあった。これらは、塩神などの生業神信仰が道教信仰・仏教信仰と習合していく過程を考察するにあたって、一つの有効な事例になると思われる。なお、塩神が他の神格の化身であると考えられるようになった例も多いが、その他の神格とは龍神と古帝王禹であることが通例であった。これは中国における、龍神信仰と中華の創設者としての禹信仰の盛行に合ったものである。

(3) 塩神信仰は塩業従事者のみならず、塩神廟所在地住民全体の経済・政治・社会活動において重要な精神的紐帯の役割をはたした。動乱や災害などにあたって地域住民が自治的な組織を創設する場合、塩神廟がその拠点となったのが、一例である。この経済・政治・社会活動において発揮された精神的紐帯としての強さは、中国の他の生業神信仰のどれよりも大きかったと思われる。

(4) 国家・地方政府当局の塩神信仰管理には厳格なものがあり、官僚・塩商人によっていわば官立の塩神廟を設立して、それ以外のいわば民立の塩神廟を軽視・弾圧したことが多かった。しかし、これに対して在地住民独自の塩神信仰が衰退したり消滅したりすることはほとんどなかった。官立の塩神廟よりもむしろ下層の塩業労働者が創設した塩神廟のほうが隆盛をほこったこととか、漢族支配下の少数民族が自身の塩神信仰を維持し続けたことなどが、その例である。また、官立の塩神廟と民立の塩神廟では祭祀される神格に明らかに相違があり、塩源の発見者や塩女神が前者で祭祀されることはほとんどなかったし、後者の神格が道教信仰・仏教信仰と習合していくことが多かったのに対して、前者ではそのような習合状況はまったく生じなかった。このような事情は、中国の民間信仰をめぐる政府と民間の関係を考察するにあたって、貴重な資料事例になると思われる。

(5) 塩神に関する伝説には抒情性に富むものが多い。甘肅省の井塩地区に見られる夫婦塩神の愛情物語や天津地区・江蘇省の海塩地区に見られる夫婦塩神の扶助物語などがその例である。これらの伝説は今なお語りつがれているものが多く、在地住民の文学的・芸術的気風の涵養に一定の役割をはたしている。

以上の学術的知見の一部は、上記「中国塩神廟調査報告」(1回)と中国での講演(1回)によって公表した。

なお、新型コロナウイルス感染症の蔓延が本研究課題の推進に与えた影響をとくに記しておきたい。延長の2年間を含む5年間の研究期間のうち、2020~2022年のおよそ3年半がウイルス感染症の継続期間であり、この間一度も中国へ渡航することができなかった。したがって予定していた5回の中国塩神廟現地調査はわずか2回を実施しえな過ぎず、予定していた4回にわたる「中国塩神廟調査報告」による調査研究成果の公表もわずか1回しか実施しえなかった。中国現地でのフィールドワークを研究方法の主旨としている本研究にとって、まことに残念な事態であったといわねばならない。そこでいたしかたなく、現地調査に備えて事前準備として収集していた関連資料を「予備調査メモ」として3回にわたって公表し、「調査報告」に代えることとしたが、現地調査をとまなわぬ調査研究成果の公表なのであるから、内容はそもそも不十分なものであったことは否定できない。とくにことわっておきたいと思う。

ただ、このような不測の事態に遭遇したにも関わらず、研究成果の達成度はほぼ7割に達したと自己評価している。それは次の三つの理由による。第一は関連文献資料をできるだけ入手して精査したことである。なかでも『瀘沽湖・摩梭母系社会』・『四川省塩源木里両県納日人社会調査』・『滇南塩法図』・光緒『劍川志稿』・『長蘆塩業と天津』・『濰坊海塩文化史』・『渝東塩史論集』といった稀少にして貴重な地方志・調査報告書・研究書を入手して、四川省南部少数民族の塩神廟、雲南省中南部少数民族の塩神廟、天津市沿岸部の塩神廟、山東省渤海湾沿岸部の塩神崇拝、重慶市東部の塩神廟について、従来ほとんど知られていなかった情報を得ることができたのは大きな収穫であった。第二はインターネット情報を十分に活用して、関連資料を収集したことである。なかでもネット上に採録されている塩神廟訪問記や観光案内パンフレットなどによって、雲南省劍川県塩女神廟の保存状況を写真付きで確認しえたことや、天津市蘆台鎮塩母廟の所在地を確認しえたことは大きな収穫であった。第三はインターネット通信によって中国の現地研究者から逐次情報を送信していただいたことである。重慶師範大学の楊華教授が幹事役であり、成都市文物考古研究所の周志清・雲南大学の陳果両氏はその直接の連絡者である。なかでも、周志清氏から四川省塩源県塩女神廟の残存情報が、陳果氏から雲南省劍川県塩女神廟の碑文情報が、いずれも写真付きで送られてきたのは、大きな収穫であった。

もちろん塩神廟現地に赴いての資料収集と神像・祠廟の撮影という重要な作業は未完であり、これなくして中国塩神廟研究資料のデータベースは完成しないわけであるが、幸いにも本研究期間終了時点と前後して、中国へのほぼ自由な渡航が可能になっている。なるべく早い時点で渡航して現地調査を再開し、収集した全資料を整理してデータベースを最終的に完成させるとともに、考察した学術的知見をあわせて『中国塩神廟訪問散記』と題した一書を編集し、研究期間終了後ではあるけれども、本科学研究費成果のまとめとして公表したいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 谷口満	4. 巻 14
2. 論文標題 予備調査メモ：中国四川省中部・重慶市東部の塩神廟	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東北学院大学・アジア流域文化研究	6. 最初と最後の頁 106～108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 谷口満	4. 巻 13
2. 論文標題 予備調査メモ：中国渤海湾西岸の塩神信仰	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東北学院大学・アジア流域文化研究	6. 最初と最後の頁 85～91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 谷口 満	4. 巻 12
2. 論文標題 予備調査メモ：中国西南地区の塩女神廟	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東北学院大学・アジア流域文化研究	6. 最初と最後の頁 92～98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 谷口満	4. 巻 11
2. 論文標題 中国塩神廟調査報告（一） 揚州塩宗廟・泰州管王廟	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東北学院大学・アジア流域文化研究	6. 最初と最後の頁 40～54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 谷口満
2. 発表標題 日本の塩神と中国の塩神－中国塩神廟調査報告－
3. 学会等名 重慶師範大学歴史与社会学院（大学院）学术講演会（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------